

1-4-10. NPO 法人西表島エコツーリズム協会（沖縄県竹富町）

（1）アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

【人口】約 2,400 人

【面積】289.61 km²

【地勢】

島の 90%以上が亜熱帯の自然林で覆われている。平地が少なく、海岸線のわずかな土地に人が居住する。沖縄県内でも標高の高い古見岳（469.5m）などの山々、県内最長の河川である浦内川を有している。島の周囲はサンゴ礁に囲まれている。

【気候、自然】

亜熱帯海洋性気候に属し、年間を通して温暖で、降水量が多い。島のほとんどは亜熱帯照葉樹林で覆われ、海岸線や河口域には日本最大級のマングローブ林が発達する。国の特別天然記念物に指定されているイリオモテヤマネコをはじめとする希少な動植物が多数存在し、独自の生態系が築かれている。

【歴史】

かつてはマラリアの発生により定住が困難な地ではあったが、500 年以上の歴史を持つ集落も存在する。19 世紀後半までは琉球王朝に統治されていた。大正から昭和初期にかけては、炭鉱採掘が盛んであった。古くからの集落に加えて、戦後の政府の移住政策による周辺の島々からの移住民が興した開拓集落が、現在の西表島を形成している。

【観光】

西表島への入域観光客数はピーク時の 2007 年で 40 万人に達しており、近年は 34 万～39 万人程度となっている。その多くは石垣島からの日帰りの団体客であるが、自然体験を目的とした個人客も 20 年ほどの間に急増している。マングローブに囲まれた河川での遊覧船やカヌー・トレッキングツアーが非常に盛んである。

【地域資源の概要】

- ・ マングローブ等の亜熱帯性植物
- ・ 亜熱帯林と滝などの地形
- ・ イリオモテヤマネコを始めとする固有・稀少生物
- ・ サンゴ礁域とそこに生息する多種多様の海洋生物
- ・ 染織物・民具などの生活文化
- ・ 舞踊・民謡などの民俗芸能
- ・ 稲作とそれに関連する風俗習慣、祭事、食文化

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

・背景

1990 年代にエコツーリズムの理念をいち早く取り入れ、日本のエコツーリズムの先進地区として注目を浴びた西表島は、西表島エコツーリズム協会（以下協会）の設立から今年でちょうど 20 年を迎える。この 20 年余りの間に、西表島の自然体験型観光は、当初の予想以上に発展・拡大をしている。

近年は、西表島を含む「奄美・琉球」の世界自然遺産登録に向けて、西表森林生態系保護地域や西表石垣国立公園が拡張されるなど、行政の動きが加速している。一方で、増加の一途をたどる観光によるフィールド利用に関しては、利用実態の把握やルールの整備が遅れていることが危惧されている。

・地域課題

平成 25 年 3 月の新石垣空港の開港以降、八重山全体の入域観光客数は好調な伸びをみせているが、実際に西表島にもたらされたのは、主に石垣島からの「日帰り」観光客の増加で、島に及ぼす経済効果は限定的である。日帰りでも手軽に大自然の中でのカヌーやトレッキングが楽しめるとあって、近年、日帰りツアーの需要が高まり、ツアー事業者の増加に歯止めがかからない一因ともなっている。

現在、ツアー事業者数は陸域のカヌー・トレッキングツアーを提供する事業者のみでも 80 以上にまで増え、利用フィールドも年々拡がりをみせている。現状のまま世界自然遺産に登録されて観光客が押し寄せた場合に、環境への負荷や地域住民の生活への影響が心配される。

ガイド認定制度の導入やゾーニング、利用と保全のルールや仕組みづくりの必要性は、以前から提唱されているが、実現には至っていない。

・これまでの取り組み

協会では、1996 年度の設立以来、エコツーリズムガイドブックの発行、エコツーリズムガイドラインの作成、ガイド養成事業など、様々な形でエコツーリズムの推進に取り組んできた。しかし、西表島における急速な自然体験型観光の拡大に追いついていくことができず、エコツーリズムの浸透は未だ限定的である。

今年度より、新たな取り組みとして、竹富町ならびに竹富町観光協会と連携したルールづくりに向けた検討事業が、ようやく本格的に動き出した。その中で、協会が、事業者、行政機関双方からの大きな信頼を得つつあり、その調整役を担える島で唯一の機関という立場を確立しつつある。

(2) アドバイザー派遣の実施概要

日 時	平成 29 年 3 月 18 日（土）～平成 29 年 3 月 21 日（火）
場 所	視察場所：島内のエコツアーフィールド、エコツーリズム関連施設 （ヒナイ川・マーレ川周辺、浦内川周辺、西表島エコツーリズムセンターなど） ・講演会実施会場：浦内公民館
アドバイザー	北海道大学 観光学高等研究センター 特任教授
参 加 者	・島内視察／意見交換参加者 計 11 名 竹富町観光協会西表世界自然遺産研究委員会 環境省西表自然保護官事務所 自然保護官 西表島エコツーリズム協会 会長 西表島エコツーリズム協会 役員（ツアー事業者含む）3 名 西表島エコツーリズム協会 会員（ツアー事業者含む）5 名 ・講演会参加者 計 19 名 環境省西表自然保護官事務所 自然保護官 環境省西表自然保護官事務所 職員 1 名 西表島エコツーリズム協会 会長 西表島エコツーリズム協会 役員（ツアー事業者含む）4 名 西表島エコツーリズム協会 会員（ツアー事業者含む）5 名 ツアー事業者 4 名 団体職員 1 名 その他地域住民 2 名
スケジュール・方法	【1 日目】 9：00～12：00 島内視察（仲間川周辺、前良川・後良川周辺など） ※アドバイザーの体調不良により中止 13：00～17：00 島内視察（マーレ川周辺、浦内川周辺など） 19：00～21：00 地域関係者との懇親会（エコツーリズムセンター） 【2 日目】 9：00～12：00 地域関係者との意見交換 14：00～17：00 うちあわせ・講演会準備 19：30～21：00 講演会 【3 日目】 9：30～ 移動 <u>アドバイス実施方法</u> ・<u>地域関係者との意見交換会</u> 現在のエコツーリズム推進状況、フィールド利用の実態などの課題を地域関係者と共有する上で、西表島の現在の自然の利用上状況や問題点を踏まえて、今後のルールづくりの進め方・手法を探る為の、自由な意見交換を行った。

・講演会

「世界自然遺産を考える～海外のエコツーリズム・エコツーリズム推進法の導入事例から～」と題して、真板氏が関わってこられたガラパゴスでの事例や、エコツーリズム推進法の導入事例を紹介いただき、世界自然遺産登録に向けての活用の可能性と必要性について講演をしていただいた。

(3) アドバイスの内容（議事録）

・地域関係者との意見交換会

意見交換会においては、エコツーリズム全体構想策定までの手順や推進協議会の運営方法等についての詳しい説明があった。さらに、全体構想におけるルールやガイドラインの例を参照して、具体的な内容についての解説があり、また、ロードマップを用いてのエコツーリズムを軸としたまちづくりのアドバイスがあった。これらに関しての参加者の質問に対しては、丁寧に回答いただいた。

・講義の概略

講義においては、エコツーリズム全体構想策定までの手順や推進協議会の運営方法等についてパワーポイントを用いて詳しい説明があった。また世界遺産登録を控えていることから、全体構想策定と世界遺産認定との関係、全体構想が世界遺産登録後にどのような効果をもたらすのか、逆に世界遺産後の社会変化を予測した時、全体構想で西表島の現状をふまえて、是非とも論議しておかなければならない内容について詳しい説明があった。この世界遺産登録後に起こると予想される様々な社会や自然へのインパクトとその取り組みの「百の成功百の失敗」と題した事例として、世界自然遺産第一号のガラパゴス諸島における 1976 年からの軌跡について講義を頂いた。

・視察

現地視察においては、今問題となっているカヌーの過剰利用と河川等への放置の現状を中心に視察した。



視察（浦内川のカヌー放置現場）



視察（マーレ川カヌー置き場）



意見交換会



講演会

(4) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

○一般参加者、ガイド事業者への効果

- ・「エコツーリズム推進法」について、一から学び、理解を深めることができた。
- ・曖昧なイメージを持っていた「エコツーリズム」に関する理解を深めたり、改めて考え直すことができた。
- ・地域住民と観光客をつなぎ合わせる意味の解釈が、今後の業務におけるヒントとなった。
- ・海外（ガラパゴス）の事例から、西表島において今後何をすべきなのか考えるきっかけとなった。

○関係者への効果

- ・行政機関（竹富町）が初めてエコツーリズム推進法の導入を本格的に検討し始めた中で、関係する人たちが、そのプロセス等を学べたことで、導入に向けての具体的なイメージを持つことができた。
- ・海外（ガラパゴス）の事例から、現在進行形で時代と共にその状況に応じた検討・対策がされていることを知り、保全と利用のバランスを保ち続けるためには、世界遺産登録の前後だけではなく、常に行政・民間の協議が必要であることを認識した。

2) 今後、期待される効果

- ・理解が深まったことで、エコツーリズム推進協議会の設立に向けての動きが加速することが期待される。
- ・行政機関（竹富町）の具体的な取り組みと同時に、民間の組織においてもそれぞれが問題を認識し、対策が進められていくことが期待される。
- ・今後は、多様な主体の連携がしっかりと図られていくことが期待される。

3) 今後の取り組み

- ・世界遺産登録に関する情報が依然不足していると感じるため、今後も継続して地域住民が勉強できる機会を設けていき、その中でのエコツーリズムの重要性をより多くの住民に知っていただきたい。
- ・竹富町ならびに竹富町観光協会と連携してのルールづくりに向けた検討事業に継続して取り組み、世界遺産登録前に可能な限りの準備をしていく。

(5) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

ようやく本格的にエコツーリズム推進法の導入が検討されようという中で、協議会の立ち上げから、認定に向けたプロセスに関して、様々な事例と共にアドバイスをいただいたことは、非常に参考になり、具体像を得ることができた。

また、海外（ガラパゴス）の事例は、関係者や多くの参加者にとって非常に興味深く、印象的であった。

長年取り組んできている「エコツーリズム」の普及啓発に関しては、今回の講演で理解が深まったという声も多く、普及啓発の手法も参考となった。

2) その他感想

20年以上前の協会の設立に多いにご尽力いただいた、アドバイザーの真板氏を、知っている世代とそうでない世代が、今回の派遣を機に、共通の認識を持ち、今後世代を越えての協働体制を取るきっかけとなったのではないかなと思う。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

真板昭夫氏（北海道大学 観光学高等研究センター 特任教授）

1) 地域における取り組みの現状と課題

①現状の取組

協会では、1996年度の設立以来、エコツーリズムガイドブックの発行、エコツーリズムガイドラインの作成、ガイド養成事業など様々な形でエコツーリズムの推進に取り組んできた。しかし、西表島における急速な自然体験型観光の拡大に追いついていくことができずエコツーリズムの浸透は未だ限定的である。今年度より、新たな取り組みとして竹富町ならびに竹富町観光協会と連携して選定地域用のルールづくりに向けた検討事業がようやく本格的に動き出した。その中で、協会が、事業者、行政機関双方からの大きな信頼を得つつあり、その調整役を担える島で唯一の機関という立場を確立しつつある。

②課題

竹富町行政が世界遺産指定への取り組みをきっかけとして、行政内にその指定後の自然環境や社会環境へのインパクトを予測し、どの様にその課題を事前に設定し、解決するための仕組みづくりを全体構想で設定できるかが最大の課題である。さもないと、近年の急激な日帰り観光客の増加とカヌー業者の増加、船艇のマングローブ林や海岸での無法な放置状態はさらに悪化すると予想される。このため対応としては林地の所有者で登録制を規則化しながら放置されている林野庁との話し合いと管理システムの再構築は急務である。またガイドによるまちまちな自然利用を整理し、ガイドラインの設定とルール化を行い、コントロールしていく実施体制の確立は急務である。これに向けては、特に竹富町、環境省、林野庁の3者による事前の話し合いと合意による実効性のあるガイドライン設定は急務である。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

西表島は歴史、文化、自然、いずれをとっても特一級であり、その優劣はない。

3) アドバイス（講義等）の概要

講義においては、エコツーリズム全体構想策定までの手順や推進協議会の運営方法等についてパワーポイントを用いて説明した。また世界遺産登録を控えていることから、全体構想策定と世界遺産認定との関係、全体構想が世界遺産登録後にどのような効果をもたらすのか、逆に世界遺産後の社会変化を予測したとき、西表島の現状をふまえて、是非とも全体構想で論議しておかなければならない内容について詳しい説明を行った。この世界遺産登録後に起こると予想される様々な社会や自然へのインパクトとその取り組みの「百の成功百の失敗」と題した事例として、世界自然遺産第一号のガラパゴス諸島における1976年からの軌跡についても講義を行った。そして危機遺産からいかに脱却し、人と自然が一体となったどのような社会システム「ソーシャルエコロジカルシステム」を構築しようとしているのかを説明した。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

竹富町として初めて担当をおき、取り組みのタイムスケジュールの検討を行うようになって来ている。

②全体構想策定への意向について

世界遺産指定を受けるにあたって、全体構想づくりの必要性は認めているものの、町役場全体の中で十分に浸透しているとは言えない部分もある。ただ観光協会とも連携しながら進める準備も見られている。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

世界遺産との関係性を一般住民へ何回も説明していく必要性を感じる。そのため、世界遺産の意義、その為の全体構想の役割と必要性を様々な手段を用いて住民に情報共有していく作業が必要と思われる。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

日本で最初にエコツーリズム協会を設立した地域が西表島である。いま西表島は 1996 年の設立から 20 年経過し千五百人前後の人口から二千数百人にもなり、それなりに自然体験型のツアー実施のエコツーリズム先進地としてイメージは定着して来た。しかしその一方で自然や歴史文化を観光の一方的な商品として消費しようとする外部からの観光業者も増えて、地域性が無視され混乱が生じているのも事実である。いま西表島エコツーリズム協会は設立当時から見て第 2 世代を迎えており、確実な世代交代が進んでいる。この意味で、世界自然遺産指定への取り組み、エコツーリズム全体構想への取り組みと推進協議会の設置によって、島の歴史と文化、そして自然が融合したエコツーリズムに取り組むガラパゴス第 5 次公園計画で始めたような「ソーシャルエコロジカルシステム」の確立に取り組む第一号の先進地モデル、世界モデルとして発展してほしいと思う。